

## 「今年の心構え」

監 事 三 宅 実

日本船舶機関士協会の会員、関係者の方々、そしてご家族様、新年あけましておめでとうございます。本年も、当協会の諸活動へのご理解とご協力のほど、宜しくお願いいたします。今年は戌年。十干や陰陽五行を加えれば「戊戌（つちのえいぬ）の陽の土」の年。その意味からは「慎重な行動が、成長を促してくれる年」であり、いわば「守りの年」だそうです。

さて、昨年、神戸製鋼、三菱マテリアル、東レの製品の品質データ改ざん、日産自動車の不正検査など、日本を代表する企業による不正が多数発覚し、技術立国の信頼を揺るがす事件が相次ぎました。

ビジネスのグローバル化に伴い、企業の収益を重視するあまり、納期や生産性を優先し、安全性に問題ないのであれば、品質基準を少々満たしていても問題ないだろうとする、納入側、受入側双方の長年の慣れ合いや甘えがこのような結果を生んだと指摘されています。ガバナンスの強化が企業の経営基盤と位置づけられる昨今、このような風潮や文化を生んだ根本原因は組織や仕組みにあるのでしょうか。その意味で、今回の問題は製造業の事件ではありますが、船の安全や品質に関わる一人のエンジニアとして、他人事ではなく、「マリンエンジニアとしてどうあるべきか？」を改めて考えさせられるいい機会となりました。

私の個人的なマリンエンジニアのあるべき姿は、法令や規則をきっちり守り、本船の安全運航と環境保全に責任をもって努めることと捉えています。それ以上に、その法令や規則は何の目的のためにあり、なぜそうなるに至ったかの「そもそも」を考え、知り、そして行動できる者でありたいと考えています。とりわけ船上のエンジニアの仕事においては、正確な点検や計測、そして確実に偽りのない記録と報告する行動こそが基本と考えています。



海上の安全輸送と環境保全を担保するISMコードが発効、履行されてから数十年が経過し、各船舶管理会社と船に乗り込む乗組員は、会社の定める安全管理システムを確実に運用するとともに、さらなる輸送品質を維持・向上に繋げる取組みにおいて、非常に多くの点検と記録が求められます。忙しさを理由に、積み重ねた経験や上辺だけの知識から「これぐらいの誤差なら問題ないだろう」、「これなら大丈夫なはずだ」という過信や慢心により、マリンエンジニアの基本となる行動を否定することは、仮にその時はうまくいったとしても、長期的には、重大な海難事故や環境汚染を引き起こす種をまいたことにはほかなりません。

この作業は、いったい何の目的でやってい

るのか、それをしないとどういった重大な結果を招く恐れがあるのかと常に想像力を働かせながら、たとえ、それが単調で地味な作業であったとしても、緊張感をもって業務にあたることが大切でないかと思えます。

新年を迎え、「そもそもを捉え行動する」を今年の私の心構えとすることを、この場をお借りし皆様に宣言させていただきます。今年「守りの年」。この年に、自身自身が大切に、今後もずっと守ってゆくものを整理し、

基礎固めをしっかりとする年にしたいと思えます。

新年を迎えて、マリンエンジニアの皆様も今年の心構えを定めてはいかがでしょうか？

最後に、改めまして、会員、また関係者の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、日本船舶機関士協会のますますの発展を祈念いたします。

